様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 １８ 日現在

機関番号：３７１０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１４６３

研究課題名（和文）民主主義理論における未来―権力・責務・代表の時間論的な再考察を通じて

研究課題名（英文）Future in Democratic Theories - Reconsideration of Power, Obligation, Representation

研究代表者
鵜飼　健史（Ukai, Takefumi）

西南学院大学・法学部・教授

研究者番号：６０７０５８２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、未来が民主主義の形式をどのように規定するのかを考えた。その理論的な射程を未来にまで拡張した現代政治学の典型的なテーマである、権力論、責務論、そして代表論を民主主義の時制という観点から再考察した。未来は予期可能であるとともに、その予期をつねに裏切る時制である。権力、責務、そして代表はそれぞれこの矛盾した性格を帯びている。そしてこれらによって構成される民主主義は不安と希望から逃れることができない。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は民主主義の時間的な側面に注目した。それは、民主主義およびその理論の飽和と行き詰まりを解消する、別の可能性のある領野を思想的に示すような作業である。民主的な時間のあり方は、民主主義の特質を表面化させ、私たちの政治的な知の世界をいっそう掘り下げることになる。また本研究では、権力、責務、そして代表についての概念分析を行い、民主主義のあり方を再構成した。

研究成果の概要（英文）：This study considered how the future defines the form of democracy. It revisited power theory, responsibility theory and representation theory, typical themes of contemporary political science, which extend their theoretical range into the future, in terms of the tense of democracy. The future is a tense that is both predictable and always betrays its predictability. Power, responsibility and representation are each imbued with this contradictory character. Democracy constituted by these cannot escape anxiety and hope.

研究分野：政治理論

キーワード：民主主義　未来　権力　責務　代表　政治責任　民衆

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

政治学・政治理論分野において、民主主義の時間論的な理解はほとんど取り扱われていない。これまで中心的な議論はいわば民主主義の空間論についてであり、民衆、政治権力、市民権、アイデンティティ、あるいは正義などの妥当範囲が分析対象であった。グローバリゼーションの時代において、たしかに政治の空間的な議論はこれまで同様に重要だが、著しく加速化する世界における政治現象の時間的特質は真摯に問われなければならない。

本研究は、民主主義理論に内在した時間的な性質を、その時制（とりわけ未来）との関係性に注目して分析する。この分析を通じて、本研究では、その空間論において議論が煮詰まり、手続き論の深化のみに活路を見出している民主主義の理論研究に、新たな領野の存在が示される。

本研究は民主主義の時間的な次元における他の体制に対する優位性を示すとともに、現状の民主主義体制を批判的に考察する。時制という観点からすれば、現代民主主義はかなり複雑な状況に置かれている。福祉政策、政治責任、国益、戦争の記憶、投票行動など、あらゆる政治的なテーマに過去と現在と未来が言説として混在している。本研究では、噴出する時制のレトリックをイデオロギーとして丸ごと排除してしまうのではなく、民主主義の原理的な性質として受け止める。この試みは、現代政治・社会を理解する上で、欠かすことのできない理論を提供するものと期待できる。

２．研究の目的

民主主義の制度化が一応達成されたとされる現代の政治状況でも、民衆による自己統治の実効性を高める意欲は民主化の過程から失われておらず、時間の民主化との接続が引き続き求められている。こうした二重の民主化にあって、21 世紀に一般的な、民主主義に対する全般的な不信は、時間の統御をめぐる既存の民主政治のシステム的な限界を示すと表現できよう。そのため、いまや政治学分野における時間の考察は、喫緊の課題となりつつある。

本研究では、これまで部分的にしか議論されなかった民主主義の時間論的な特徴を体系的に考察し、ますます加速化が叫ばれる現代社会の政治構想の一助となることを目指している。本研究ではとりわけ「未来」の民主主義理論における意味を中心的に考察し、時間論的な観点から、民主主義の特質を明らかにする。

民主主義の理論分析に時間および未来という観点を導入するという本研究の視点は、それ自体が画期的であり、民主主義の新たな可能性を展望する。さらに研究方法として、本研究の学術的な独自性および創造性は、クロノスとカイロスというふたつの時間意識への着目にある。クロノスは量的に計測可能な継続的な時間であり、カイロスは時間の質的な変容を伴う行為の契機を意味する。(Hutchings, Kimberly (2008) *Time and World Politics: Thinking the present*, Manchester University Press, pp.5, 49)。政治を根本的に規定するクロノスの民主化と平行して、政治的行為のタイミングと関係するカイロスが、民主主義段階においては権力闘争の重要な次元として台頭してきた。本研究は、これら時間軸に現出する民主主義の意味を分析し、時間や未来に関するその理論的な特徴を考える。

３．研究の方法

本研究は、その理論的な射程を未来にまで拡張した現代政治学の典型的なテーマである、政治権力論、政治的責務論、そして代表論を時制の観点から再考察する。これらの予備考察によって

未来の政治理論的な特徴を抽出し、民主主義における時制の検討を促進する。

本研究はまず、S・ルークスが定式化した三次元的権力観を中心に、既存の政治権力論の研究成果の再検討を行う。このとき注目されるのは、いずれの権力論も、権力が作用するためには、いつかやってくる未来との空間的な同一性が求められる点である。クロノス的な時間軸にもとづく権力の二者間関係論は、その設定自体が「一定の倫理的かつ政治的立場」による権力的なものであり、それに応じた特定の責任の形態を必然的に付与するものとなる。だが、権力の作用する未来が確定的であるならば、政治主体の自律性は無意味であり、権力はたんなる支配と同義的となってしまう。本研究では、権力の存在にとって、未来が確定的かつ非確定的なものとして両義的に作用する点を明確化する。

未来における応答可能性という意味で、責務論にも本研究は意欲的に取り組む。本研究の意図は、責務の発生を十全に論理化するよりも、その断片的な性格を明らかにしつつ、（未来ではなく）現在の民主主義の評価に依存している点を分析することである。その意味で、責務への応答的な未来が想定できるかは、政治的行為の空間的で手続き的な一貫性だけでなく、現在の政治秩序の全般的な有効性に依存している。具体的な事例として、C・ペイトマンの参加民主主義論における責務の定式化を批判的に読解し、未来の理解を抽出する。

政治的代表論において、近年代表における政治主体の構築的な作用への注目が高まっており、その中で将来世代の代表が論じられつつある。本研究では、将来世代の代表論に関して詳細に分析を進めて、そこで未来がどのようなものとして想定されているのかを自覚的に検討する。本研究が注目するのは、私たち現役世代と将来世代との「同一性」の形態であり、その評価自体が現実の政治闘争の産物だという事実である。

このように、既存の政治理論研究の主要なテーマを未来という観点から再考察することを通じて、民主主義の時間的な性格を明らかにするとともに、その政治主体（デモス）を分析する必要性を導く。本研究では、デモスを定式化する上で、未来がどのような意味をもちうるかを最終的な分析課題とする。その際、デモスの確定に関して、支配行為の事実を優先する「被支配原理」と、政治決定の影響範囲にもとづく「被影響原理」との年来の論争を、政治的時間の観点から改編する。この課題は、N・フレイザーの後者から前者への理論的な「転向」を分析対象として、その意味を考察する。またJ・デリダの「来るべき民主主義」論を参照軸として、デモスと未来の関係を分析する。

４．研究成果

本研究の成果は、以下の研究業績に結実した。

① 時間と民主主義に関する書籍（24年冬に出版予定）

権力論、責務論、代表論などの個別のケース・スタディは、同著の第3章を構成する。第3章では未来に関する政治理論が分析され、予測可能性と予測不可能性という二重の性質が論じられる。この章については書下ろしとなる。

② 「論民主的終結」（民主主義の終わりを論じる）雑誌『思想』51号に所収

民主主義の未来を考える本研究は、その終わり方についても検討した。民主主義がどのような条件で終わるのか、あるいは終わらないかについては、民主主義自体の価値が先鋭的に問われている中華圏のジャーナルに投稿された。24年秋には、中華圏の代表的な雑誌『思想』51号で掲載見込みである。

研究テーマ「民主主義理論における未来―権力・責務・代表の時間論的な再考察を通じて」に

ついて、研究期間を通じて十分にまとめることができた。とりわけ 23 年 3 月および 24 年 3 月の二度にわたり国立政治大学で講演会を企画していただき、本研究テーマを報告する機会にめぐまれた。この機会は本テーマをまとめる契機となっただけでなく、中華圏で本テーマを公表するきっかけとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鵜飼健史
２．発表標題 日本社会・政治における責任と無責任
３．学会等名 国立政治大學日本語文學系演講（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 鵜飼健史
２．発表標題 政治責任の取らせ方について
３．学会等名 政治理論研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 鵜飼健史	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 256
３．書名 政治責任－民主主義とのつき合い方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	国立政治大學日本語文學系			